令和8年度 中学生の「税についての作文」受賞作品 ＜静岡地区＞

賞	学校名	学年	氏名	題名	頁
東海税務連絡協議会会長賞	静岡市立南中学校	3年	佐野 梨愛	もしもの未来を支える税	2
静岡税務署長賞	静岡市立西奈中学校	2年	中山 結月	「目を向けるべきもの」	3
静岡県静岡財務事務所長賞	静岡市立大里中学校	3年	山本 紗良	税と向き合うことの大切さ	4
静岡市長賞	静岡市立南中学校	3年	齋藤 逞	支えるを「支える」税金	5
静岡税務連絡協議会会長賞	静岡市立中島中学校	3年	佐々木 友紀	去年の私に教えたい税の役割	6
静岡納税貯蓄組合連合会 会長賞	静岡市立中島中学校	3年	内山 明凜	私の嫌いなもの	7
東海税理士会静岡支部長賞	静岡市立西奈中学校	1年	保科 創也	普通の道	8
一般社団法人静岡青色申告会 会長賞	静岡市立西奈中学校	1年	八木 莉奈	税金がつなぐ、私たちの未来	9
一般社団法人静岡法人会 会長賞	静岡市立城山中学校	3年	田形 香梨	税と私たち	10
静岡間税会会長賞	静岡市立西奈中学校	1年	橋本 奏大	当たり前の学校生活と税金	11
静岡酒類行政連絡協議会 会長賞	静岡市立城山中学校	1年	竹下 舞	私たちの生活を充実させる税	12

※掲載にあたり、一部の誤字等を修正しています。

「もしもの未来を支える税」

静岡市立南中学校３年　佐野　梨愛

私は静岡市で暮らす中で、南海トラフ地震について考えることがあります。南海トラフ地震が起こったら静岡も安全なわけではありません。静岡市では、南海トラフ地震による津波を想定し、津波避難施設の設備など、さまざまな対策が行われています。私はそのことを知り、こうした防災対策にも税金が関わっているのではないかと疑問に思い、税金について調べてみました。

私たちが納める税金には、所得税や消費税などの国に納める税金と、住民税などの地方公共団体に納める税金があります。集められた税金は、教育、道路、ごみの収集など私たちの生活を支えるために身近なところで使われています。自分が直接利用していない施設やサービスにも税金が使われているのは、一人一人が社会の一員として支え合う仕組みがあるからです。そして、この仕組みは南海トラフ地震への備えにもつながっています。例えば静岡市では、民間の建物を津波避難ビルとして利用できるようにしたり、津波避難タワーの施設の整備や防災用品などにも税金が使われています。南海トラフ地震で特に大きな被害が想定される津波から、市民の命を守るための重要な取り組みです。

ここで私は、税金の大切な役割に気付きました。税金は、災害が起きた後に道路や施設を直すためだけに使われるのではありません。災害が起こる前から、避難する場所を整えたり、防災設備を整備したりすることで、被害を少しでも減らすためにも役立っているのです。つまり税金は、「もしものとき」のために、今から未来を支えているのだと思います。南海トラフ地震がいつ起こるかは正確には分かりません。だからこそ、起きてから考えるのではなく、起こる可能性を考えて準備しておくことが大切です。その準備を個人だけで行うのではなく、地域全体で行うために、税金が使われていることに意味があると思います。

今回税金について調べる前は、私は税金を自分とは少し遠いものだと思っていました。しかし、調べてみると税金は毎日の生活を支えるだけでなく、静岡市で暮らす私たちの命や未来を守るためにも使われています。これからは、税金を「払わなければならないもの」と考えるのではなく、社会全体で支え合うための大切な仕組みとして考えていきたいです。そして静岡市で暮らす一人として、防災について関心を持ち、税金がどのように私たちの生活や未来を支えているのかを知っていきたいと思います。

「目を向けるべきもの」

静岡市立西奈中学校２年　中山　結月

「税金は、あまり払いたくない。少ない方が良い。」私は、税金に対してそんな印象を受ける。ニュースや選挙などで「減税」が取り上げられることも多いため、そう思う人は少なくないのではないか。実際、世論調査の結果、減税には約七割の人が賛成している。

では、なぜそのように思ってしまうのか。私は、二つの理由があると考えた。一つ目は、日本の歴史だ。歴史の教科書では、多くの時代で税の負担について語られている。奈良時代、「租調庸」の制度が整えられ、税を納めることが義務付けられた。それが、農民の大きな負担になったと表記されている。また、その時代に集められた税の一部が、貴族の豊かな暮らしを支えるために使われていた。そんな歴史からも、なんとなく税金に対して良くないイメージがあるのかもしれない。

二つ目は、税金の恩恵が間接的な点だと思う。私たちが買い物をする際は、お金を払えばすぐに商品を得られる。一方税は、私たちの使う教科書や学習用端末、学校の校舎や公園、道路や信号などに使われるが、私たちが「買った」と感じることは難しい。負担してから返ってくるまでの道筋が遠いことから、税を払いたくないという思いが生まれてしまっているのではないか。

だが、歴史を見ても人々が負担した税のおかげで国が発展してきたと思う。道路や農地が整備され、産業の発展を促進させてきた。今でも、税金の多くは道路整備や学校運営、医療費などにも使われており、私達の生活に大きく役立っている。間接的でも、私たちはとても大きな恩恵を受けている。人々が税を払うことで、国が豊かになり、一人ひとりの生活も豊かになってきた。それは、少人数では絶対にできなかった。私はこの、「みんなが少しずつ負担することで、大きな力となってみんなの役に立つ」という税の仕組みの効果に目をむけることが大事だと思う。

例えば、学校での掃除。掃除の時間は私の学校では十分間で、時間内で終わらせることができる。だが、一人で教室全体を掃除しなくてはいけなくなった場合、その大変さは今の比にならないと思う。嫌なことも、みんなで少し取り組むだけで、日々きれいな教室で生活することができる。掃除がめんどくさい、やりたくないという気持ちより、みんなで掃除をすることできれいな教室で日々過ごすことができるという成果に目を向けることが大切なのではないか。このように、結果どんな良いことがあるかということに目を向けることで負担感も減ってくると思う。今後納税者の一人となっていく中で、これからの歴史の学習や日々の生活で、みんなで負担することで得られる効果に目を向けていくことを大切にしたい。

「税と向き合うことの大切さ」

静岡市立大里中学校３年　山本　紗良

私の父が亡くなって、二年が経つ。ちょうど小学校の卒業式の直前だった。死因は中咽頭がんだった。亡くなる直前まで入院治療をしていた父と私たち家族にとって、支えの一つとなったのは高額療養費制度であった。

高額療養費制度とは一ヶ月にかかった医療費の自己負担額が高額になった場合、限度額を超えた分が公的医療保険から払い戻される制度のことである。この制度のおかげで多額の治療費を払うことなく、父は本来なら高額であるはずの治療を、何度も受けることができたのである。

今思えば父と私たち家族は税という形で知らない内に社会に助けられていたのだ。例えばコンビニで食べ物を買う時、八パーセントの消費税を支払わなければいけない。前まで私はそれを面倒だと思っていた。ただでさえ食べ物の料金を支払うのに、それに加えて八パーセントなんて嫌だなと。しかし父が病気になってからそのような考えは一変した。なぜなら父が頼っていた高額療養費制度は国民が納める税金が使われていると知ったからだ。私はそのときハッとした。見えないところで国民に助けられているのだと思ったからだ。そこから私は消費税を責任持って支払おうと思えた。税について何も知らないまま払うのではなく、しっかりと理解することが、納税者に対する最大の感謝の表しだと思う。

しかし、かつての私のように税を面倒だと思う人も国民の人にはいるだろう。そのような人たちの考え方を変えるために、税の使い道を学ぶ機会を作ることが大切だと思う。そこで私は二つの税を学ぶことができるイベントを考えた。

一つ目は、国税庁主催の出前授業である。これはターゲットを子どもに絞り、小さいうちから税への関心を高めることができると考える。

二つ目は、ショッピングモールなどの人がたくさんいる場所の一角で税の講座をしたり、チラシを配ることである。特に休日は家族連れが多く、気軽に講座を受けられることから大人も税への関心を高めることができると思う。

これらのイベントを全国各地の国税庁が開催し、情報に偏りのない授業・講座をすることで国民が税の知識をつけられる環境をつくることが大切だと思う。

日本国民が、税が何に使われているか、だれが救われるのかが伝わることで、少しでも「納税っていいな」と思えればいいと思う。そして税で日本の未来がもっと明るくなることを願っている。

「支えるを「支える」税金」

静岡市立南中学校３年　齋藤　逞

「税金は、払うものだ」と僕は、なんとなく思いながら生きてきた。でも、なぜ払わなければならないのだろう？「法律で決まっていて、国民の義務だから」と言われれば、それまでかもしれない。けれど、そんな考えを変える出来事が起こった。その出来事とは、「祖父の介護」のことであった。

小さいころ、僕はよく祖父母の家へ遊びに行っていた。遊びに行くと、祖父は、いつもどこかへと連れ出してくれた。僕は、そんな何気ない時間がとても好きだった。しかし、ある日を境に、祖父の物忘れが激しくなっていった。今何をしようとしていたのかも忘れてしまうことが増えた。心配になった祖母が祖父を病院に連れていくと、医師から認知症と診断された。以前とは違い、急に大声で怒鳴ったり、思いがけない行動をしたりすることも増えていった。僕は、「今までの祖父はどこへ行ってしまったのだろう」と感じた。そんな祖父の介護を、主に祖母がしていた。祖父の様子が変わっていく中で、祖母も戸惑いながら介護を続けた。僕はその姿を見て家族だけで介護をすることは、とても大変なことだと実感した。一人で抱え込むのではなく、誰かの力を借りることも必要なのだと思った。そこで利用したのがデイサービスなどの介護サービスだった。祖父がデイサービスを利用することで、祖母もその間休むことができ、家族だけで抱えていた負担を減らすことができた。その後、僕は介護保険について調べた。すると、介護保険の財源には税金も使われていることを知った。それまでの僕は、税金とは「国民の義務だから、仕方なく払うもの」くらいにしか考えていなかった。しかし、祖父の介護を通して、税金が大切な人の生活を支えることにも使われてると知り、税金を身近なものとして考えるようになった。

祖父はその後亡くなった。今振り返ると、介護サービスなどの支えがあったことは、祖母や家族にとって大きな助けになっていたと思う。

僕は今、税金をただ「義務だから払うもの」だと思っていない。自分や大切な人、そして誰かの生活を支えるために、みんなで負担しているものだと思う。

「去年の私に教えたい税の役割」

静岡市立中島中学校３年　佐々木　友紀

去年の夏、私は学校の宿題で税についての作文を書いた。当時の私は税への認識が甘く、調べても仕組みや必要性が理解できなかった。締め切りに追われて原稿用紙を埋めたものの、夏休みが終わっても「税は何のためにあるのか」という疑問だけが残っていた。

しかし今年、中学校の公民の授業で詳しく学んでいる中で、私の見方は大きく変わった。私たちが何気なく過ごしている日常の中に、税が隠れていると知ったからだ。

例えば、毎日歩く道路の整備や学校で配られる教科書はすべて税で賄われている。私たちは教科書を「タダでもらえる」と思いがちだが、実は一冊一冊に大切な税が使われている。また、安心して医療を受けられる「当たり前」の日常に、税が深く関わっていることを初めて実感した。

もしこの世に税がなかったら、社会はどうなるだろう。ゴミ回収は止まり、火事や事件が起きても警察や消防は動かず、道に穴が開いても誰も直さない。社会の仕組みは一瞬で崩れてしまう。すべてを自己責任で解決しようとすれば、貧しい人は生きることすら困難になる。

そう考えると、税とは決して国に強制的に「取られているもの」ではないと強く思った。私たちが安全で豊かな暮らしを送り続けるために、社会全体で「みんなで出し合っている会費」のようなものなのだ。

中学生の私は、まだ働いて所得税を納めているわけではない。しかし、お店でお菓子を買うときの消費税を通して、すでにこの社会を支える立派な一員になっている。私が払ったわずかな消費税も、めぐりめぐって誰かの安心や未来の教科書代になっているかもしれない。

これからは、去年の私のように「税って何だっけ」という無関心な態度で終わらせたくはない。自分が社会の一員である自覚をしっかり持ち、みんなから集められた大切な会費が、これからの未来のためにどのように使われていくのか、選挙や政治のニュースにも関心を持って見守っていきたい。そして、ただ眺めるだけでなく、その使い道が本当に正しいのか自分なりの意見を持つことが大切だ。将来、私たちがこの社会の主役となって次の世代へ繋ぐために、税への学びを深め、責任ある有権者へと成長していきたい。

「私の嫌いなもの」

静岡市立中島中学校３年　内山　明凜

私は税金が嫌いだ。飲食料品では八％、日用品などでは十％も追加で払わなくてはいけない。私はいつも「税金がなければもっと安く買えるのに。」と思っていた。だから私は税金が嫌いだったし、それがどこに使われているかを知ろうともしていなかった。

しかし、この作文を書くことになり人生で初めて税金について調べてみた。税金は当時の内閣総理大臣であった竹下登総理が一九八九年四月一日から税率三％でスタートしたことが分かった。そうしてはじまった税金は、年金や医療、防衛費そして私たちが毎日通っている学校校舎の建設や教科書などに使われていることが分かった。私たちが日々当たり前に使っているものの多くが税金によって使えており、今まで「ただ払っているだけ。」と考えていた税金がすごく身近なものに感じた。

調べていてびっくりの連続だった私が一番おどろいたものは「助成金制度」だ。これは国や地方自治体が企業や個人に対して支給する返済不要の資金で、個人の生活や医療費の負担を軽くすることなどに使われている。耳がきこえない、目がみえないときに使用される補聴器や白杖などは私たちの税金によって払われているのだ。それらはとても高価なもので簡単に出せるような金額ではない。だけど払わなくては生活できない。そんな人々を支えているものが税金なのだ。

私はまだ働いていない。だから私が払っている税金は消費税くらいだ。この消費税を払うとき、私が追加で払う八％、十％は困っている人々、そして自分自身の助けになると思うとこのことについて調べる前の私より少しほこらしい気持ちで払えると思う。そして私は四年後大人になる。そうしたら今の消費税に加え所得税、住民税、固定資産税など払わなくてはいけない税がもっと増える。以前の私が知ったら、「最悪」「大人になりたくない」などと思っただろう。しかし今の私は色々の人の支えになれると分かり、大人になることが少し楽しみなくらいだ。私は税金が嫌いだ。この思いが完全に消えたというわけではない。しかし私たちの真面目で懸命な労働や納税によって、顔も知らない誰かの病気などを支え、助けることができる。私は今子供だから支えられている側である。だから今は周りの人々に感謝しながら生き、大人になったときに支える側の人になりたい。いつか、私は「私は税金が嫌いだ」ではなく「私は税金が嫌いだった」と胸を張って言える大人になりたい。

「普通の道」

静岡市立西奈中学校１年　保科　創也

ぼくがいつも通っている「普通の道」。ぼくはそのありがたさを知らないでいました。

そこで、道路などを整備することに税金が使われているのを初めて学び、初めて普通の道のありがたさを感じることができました。

ぼくの普通の道のありがたさを感じた理由は主に二つあります。それは、きちんと整備されていることと、歩きやすいことです。日本の道は、きちんと整備されていてきれいです。でも、世界中には、道路がきちんと整備されていない国もあり、「日本の道はとてもきれいだ」と言ってくれる外国人の方もいます。

そこから、日本の普通や当たり前は、普通ではなく、特別で日本らしさのある、世界にほこれることだと感じ、そんな道を毎日当たり前のように使えることに感謝したいと思いました。さらに、日本の道はとても歩きやすいです。これは、きちんと整備されている話と似ていますが、きちんと整備されているからこそ、滑らかで歩きやすい道があるのだとぼくは考えました。世界中には、でこぼこな道が多く見られる国があります。でも、日本は、滑らかで平らな道がたくさんあります。

さらに、歩行者と自転車の歩く、走る場所が分けられていたり、時間が経ってでこぼこになった所が直してあったり、危ない所には柵やガードレールが設置してあったり、歩行者などの安全が取れ、安心して歩けるような工夫がたくさんされています。そのような所から、ぼくは、日本の道には「思いやりの心」があると思い、そこからもありがたさを感じました。

ぼくは、今まで税金について考えたことはほとんどありませんでした。しかし、道路の整備や水道、学校の設備など、様々な場所で税金が使われていることが分かり、税金の大切さを感じることができました。さらに、嫌だった消費税などの税金も、自分たちが安全に暮らせる、もっと快適に暮らさせてくれるような、必要な税金だと思え、消費税十パーセントの制度も納得できるようになりました。

今回、税金や税金の使われ方について調べてみて、当たり前のようなものやことに、ありがたさを感じることができたり、税金の必要性や大切さを感じたりすることができ、それぞれに自分の思いが持てるようになりました。

これからぼくは、日本の当たり前は、当たり前ではないことを忘れず、それが毎日使えることに感謝の気持ちを持ち、日々を過ごしていきたいと思いました。

「税金がつなぐ、私たちの未来」

静岡市立西奈中学校１年　八木　莉奈

「どうして働いて手に入れたお金から、税金を取られなければならないのだろう。」これが、私がこれまで税金に対して考えていたことだった。ニュースなどで増税や減税の話題を見るたびに、税金は私たちの生活を苦しくする、少し厄介な存在のように思えていた。しかし、ニュースで大きな地震の被災地に、自衛隊や他県の消防隊が駆けつけて救助活動を行っている映像を見た。そこでアナウンサーが「国の備蓄や予算、つまり税金が災害時の支援に充てられています。」と言っていた言葉が耳に残った。そこから私の税金に対する考えが変わり始めた。

もしも、この世界に税金がなかったらどうなるだろう。私は考えてみた。まず、私たちが通っている学校の教科書は、すべて自分でお金を払って買わなければならない。それどころか、学校の校舎を建てる費用も、自分たちで払うことになる。お金がない家庭の子どもは、学校に通うことすらできなくなるかもしれない。

学校の外に目を向けても、恐ろしいことばかりだ。道を歩いていて火事が起きていても消防車を呼ぶのにお金がかかる。消防だけでなく、警察を呼ぶときも、一回ごとに高額な料金を請求される。これでは安全に生活することはできなくなってしまう。さらに、道路のひび割れは放置され、ゴミの回収も行われず、街は荒れ果ててしまうだろう。

このような「もしもの世界」を考えてみて私は深く考えさせられた。私たちが普段、当たり前のように安全で、清潔で、公平な生活を送ることができるのは、すべて税金のおかげだったのだ。公園で遊ぶことも、綺麗な道があることも、すべて税金という仕組みに守られている。税金とは、決して国に「取られている」ものではない。私たちがこの社会という大きなコミュニティで、誰もが安心して幸せに生活していくためのお金なのだ。

今はまだ中学生の私は、消費税を払うことしかできない。しかしその小さなお金も、誰かの医療費や、お年寄りの生活を支える年金、そして、私たちの学びの環境へとつながっている。これからは、税金を義務として払うのではなく、社会を支える大切な仕組みとして払いたい。そして、大人になったときには私が、税金を納めることで、次の世代の子どもたちや社会を支えられる立派な社会人の一人になりたいと思う。

「税と私たち」

静岡市立城山中学校３年　田形　香梨

私は、税金についてもっと知ることが大切だと思います。商品の本体価格が大きく書かれていたので、そのお金を払うと思っていました。実際に買うと値段が高くなっていて、レシートで確認をすることが多々あり、税金に対してマイナスな印象をもっていました。

そこで私は、一番身近な消費税について考えました。消費税とは、ものやサービスを購入したときにかかる税金のことです。消費税は、年金・医療・介護・子育て支援に使われています。主な特徴は、景気に左右されず、常に安定して集まる税金です。消費税は、いろんな世代の人が平等に負担していて、社会を支えていることがわかりました。そこで、身近に払う他の税について聞きました。お父さんの給与明細書を見せてもらいました。健康保険料や介護保険料、厚生年金保険料、所得税、住民税がありました。思ったことは、こんなにも収入が少なくなってしまうかと恐ろしく感じました。将来、働いたときに払う所得税についても調べてみました。所得税とは、個人の所得に対してかかる税金で、すべての所得から所得控除を差し引いた、残りの課税所得に税率を適用した税率を計算します。消費税とは違い、所得税の使われ方は様々で、上下水道の設備、道路の舗装工事など、暮らしの半分以上が税金によって作られてことがわかりました。そんな社会をささえるところに使われていることを知り、大人の力は抜群だと改めて実感しました。所得税以外に住民税という税金についても調べたら、国ではなく、住んでいる市町村に。私なら、静岡市に納めているようです。それぞれの市町村で納める金額が違い、所得税を調べた際に国税には、法人税や相続税などがありました。お父さんに税について聞いたときには、固定資産税という家を所有している人は払う税もあり、年間で十六万円以上国に納めているそうです。固定資産税だけでもたくさんの税金。収入から引かれたいろんな税も合わせると、これらの税金は、私たちが暮らしている日本を支えています。身近なところから、遠く離れた場所まで、すべて当たり前ではないからこそ、両親やおじいちゃんとおばあちゃん、そして日本の人々に感謝しながら生活していこうと思いました。税の現状についてを気になったら調べたり、聞いてみることの大切さも作文を通して学ぶことができました。そして、さらなる日本の未来への成長に期待と希望を込めて、これからも税について考えて行動していきたいと思います。

「当たり前の学校生活と税金」

静岡市立西奈中学校１年　橋本　奏大

僕は少し前まで、税金のことを「買い物をするときに余分にお金がかかる、損をするいやなもの」だと思っていました。実際にゲームのソフトを買ったときは、「なんでこんなに消費税が取られるのだろう」と、税金に対して不満すら感じていました。

しかし、小学校の終わりごろ、税金について詳しく学び、僕の見方は大きく変わりました。僕たちが毎日当たり前のように送っている学校生活の中には、たくさんの税金が隠れていたのです。

例えば、毎日使っている教科書です。裏表紙には「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書かれていました。今まで何気なく使っていた教科書一冊にも、税金が含まれているのだと知っておどろきました。また、授業で使うパソコンや、教室のエアコン、校舎も、すべて税金で作られています。もし税金がなければ、僕たちは毎年高い教科書代や施設利用料を払わなければならず、全員が同じように勉強することは難しかったかもしれません。

学校の外に目を向けても、公園の遊具、きれいに舗装された道路、そして事件や火事などから守ってくれる警察や消防など、僕たちのあらゆる場所が税金で支えられています。

そう気づいたとき、税金は決して「取られている損なもの」ではないと思えるようになりました。みんなが安全で快適に、そして平等に暮らすために出し合っている「社会の会費」なのだと、思います。

今はまだ中学生なので、払っている税金は主に消費税だけです。しかし、間もなく義務教育を終えて社会に出ていく一人として、税金の仕組みや使い道に関心を持つことはとても大切だと思います。将来、大人になって働いて税金を納めるようになったとき、僕は社会を支える一員として責任とほこりを感じたいです。

「私たちの生活を充実させる税」

静岡市立城山中学校１年　竹下　舞

私が小学生のとき、税のことをくわしく知らず、初見であまりいいイメージではないのかなと思っていました。しかし、税は私達の生活を充実させてくれているのです。

この世から税がなくなるとどうなるでしょう。税金がなくなると、警察や消防、救急車の利用が有料化され、自分たちの通っている公立学校が廃止されるなど公共サービスが停止します。道路や信号の整備もできなくなり、私たちが安心して生活ができているのは税金があるからなのです。

ところで、大人の方々が納めてくれている税金は、三十三パーセントが医療費やお年寄りへの年金、介護サービスを支える社会保障に使われ、学校の校舎を建てたり、教科書を配ったり、みんなが平等に勉強をするための教育にもたくさんの税金が使われており、他にも色々なことに税金が使われていておどろきました。加えて、警察や消防は、みんなが安全に生活するための公共サービスや、道路や水道、橋、公園などを新しくしたり、修理したりする公共事業にも税金が使われていて、毎日安心して生活するための土台になっています。毎日通る通学路、当り前のように使っている教科書も全て、いろんな方が納めてくれた税金で生活できています。

だが、私たちは、まだ中学生で税金をはらっていないけど、教科書や学校などで色々な人から恩けいを受けています。また、今まで当たり前だと思っていたことも多くの人が納めた税金で支えられているのです。

つまり、自分たちが安心・安全に生活できているのは、税金のおかげというのが分かりました。大人になったら多くの人を支えられる税金を納めたり、税金をムダにしない社会になってほしいと心から思いました。自分たちが当り前のように学校に通い、給食を食べて、当然ながら授業ができるという生活に感謝をしながら、生活していきたいです。